金槐和歌集試論

――定家所伝本と貞享本とについてのノート――

仲野良一

源実朝の歌風について、その万葉調・古今調・新古今調または実朝個有の歌調等について、あるいはその変遷や展開については、現在までいろいろの秀れた立論がなされている。そしていまだ決定的な輪郭を全体的に明確にしたものはないのである。しかしながら、ある意味での「実朝的なるもの」の文学的個性傾向についての共通した理解は、そういうものの集積の上に、自然にできているように見受けられ、それあるが故にこそ、それを媒材にし、あるいは基調にし、またはそれに対立して種々の立論がなされもするのである。そうしてその立論の過程にあって、実朝作品の本文批評も、個々の作品については数多く行われているのであり、実朝の作品論を根拠づけるためには、そういう本文批評もこれを欠くことは許されないし、特にその歌風評価の上では最も重要な操作である。

いま、そのような個々の作品について任意に取りあげるだけでなく、これを全体的にある条件につき見通しをつけようとすることは、ある意義をもつであろうという意図にもとづいて一つのまとめをしたいと考えるのである。

尤も、金槐和歌集の作品には、習作的な作品[1]も相当含まれており、また時流に従わず、当時としては特異な発想や用語をみることができ、同一歌での伝本の上での異同について、実朝の作品としてそのいずれが妥当であるかを、歌風の特徴から判定することは至難な場合が多くある。そういう曖昧さが残ることを予期しながら、ある条件のもとでの定家所伝本と貞享本との両本比較のノートを、ここに作っていきたい。

伝本については、群書類従本が、定家所伝本の系統であることが大体認められているので、この小論においては、定家所伝本と貞享四年板本（昭和三十八年発行、岩波文庫「金槐和歌集」第二一刷改版が、最も両本の原型に忠実に従っているので、すべてそれによることとした。）とによることとする。（以下、両本をそれぞれ「定家本」「貞享本」と記す。）

まず両本の間に異同のある歌数を掲げると、次のようである。（貞享本の分類による。）

巻之上	春部	一三二首のうち	三五首
	夏部	四七首のうち	七首
	秋部	一三二首のうち	四四首
	冬部	九五首のうち	二五首
巻之中	恋之部	一五五首のうち	三九首
巻之下	雑部	一五五首のうち	四〇首
	計	七一六首のうち	一九〇首

右の一九〇首は、両本における誤写[2]と考えられるものを除外したものであるが、実際に誤写であるかどうか現在では判別が困難であり、語句の異同との間に、すべてが判然と区別できるとは考えられないので、一応一九〇首前後の作品での異同とするのが穏当であろう。

一

まず定家本と貞享本とを対照する手始めとして、その当否の判定の拠を、便宜的に次のように、極めて常識的な条件によって類別することとする。

一、作品の発想からみて、定家本の方が一首の歌意の上から妥当とするもの。

二、語法の上から、定家本の方が一般的に考えて妥当とされるもの。（ただし、これに属するものは、主として歌意の問題として扱わねばならぬものに含まれる歌が多く、単純に語法だけの問題として考えるべきものは至って少数である。）

三、一首の声調からみて、定家本の方が穏当であると思われるもの。

四、いずれが妥当であり穏当であるとも判定の下しにくいもの。

五、右の一・二・三の条件をそのまま逆に、貞享本の方をよしとするもの。

以上の類別によってこれを集計する。

一項と二項を合せて	六一首
三項	二三首

四項　九二首
五項　一四首
計　一九〇首

二

表一・二項を合せた六一首から、岩波文庫「金槐和歌集」に従って、貞享本の歌を先に、定家本の歌を後におく形で、適宜抽出する。

(1)草ふかき霞の谷にはぐゝまる鶯のみやむかし恋ふらし　（貞　一四）

くさふかきかすみのたにゝはぐゝもるうぐひすのみやむかしこふらし　（定　五四）

(2)桜花散らまくをしとうちひさす宮路の人ぞとのゐせりけり。　（貞　四五）

さくらばなちらまくをしみうちひさすみやぢの人ぞまとゐせりける　（定　六三）

(3)み吉野の山したかげの桜花咲きてたてると風に知らすな　（貞　四七）

みよしのゝやましたかげのさくらばなさきてたてりとかぜにしらすな　（定　五五）

(4)③山風のさくらふきまき散る風のみだれて見ゆる志賀の浦波　（貞　七七）

やまかぜのかすみふきまきちる花のみだれてみゆるしがのうらなみ　（定八八）

(5)我心いかにせよとか山吹のうつろふ花のあらしたつみむ　（貞　一三一）

わが心いかにせよとかやまぶきのうつろふはなにあらしたつらん　（定　一〇一）

(6)夏衣たちしときより足引の山郭公なかぬ日ぞなき　（貞　一四二）

夏ごろもたちし時よりあしびきの山ほととぎすまたぬ日ぞなき　（定　一二〇）

(7)秋はぎの下葉もいまだうつろはぬけさ吹風は袂さむしも　（貞　二〇四）

秋はぎのしたばもいまだうつろはぬにけさふくかぜはたもとさむしも　（定　一八九）

(8)秋風はあやなく吹そ白露のあだなる野辺の葛の葉の上に　（貞　二一九）

秋かぜはあやなゝふきそしらつゆのあだなるのべのくずのはのうへに　（定　一九六）

(9)から衣いな葉の露に袖ぬれて物思へともなれるわが身は。　（貞　二四七）

からごろもいなばのつゆにそでぬれてものおもへとも
なれるわが身か　（定　二三三）

(10)夕づく夜沢辺にたてるあしたづの鳴音悲しき冬ぞ来にけり　（貞　三二四）

ゆふづくよさはべにたてるあしたづのなくねかなしき
冬はきにけり　（定　二八六）

(11)冬ふかき氷やいたくとぢつらむかげこそ見えね山の井のみづ　（貞　三三六）

ふゆふかみこほりやいたくとぢつらしかげこそ見えね
山の井のみづ　（定　三四一）

(12)とりもあへずはかなく暮て行年のしばし留むる関守もがな　（貞　三九九）

とりもあへずはかなくゝれてゆくとしをしばしとゞめ
むせきもりもがな　（定　三四八）

(13)かづらきや雲をこだかみ雪しろし哀と思ふとしの暮かな　（貞　四〇三）

かづらきや山をこだかみゆきしろしあはれとぞ思とし
のくれぬる　（定　三四五）

(14)心をししのぶの里におきたらばあふくま川に見まくちかけむ　（貞　四七八）

心をしゝのぶのさとにをきたらばあふくまがはゝみま
くちかけん

(15)住の江のまつこと久になりにけり来むと頼めて年の経ぬらむ　（貞　四九二）

すみのえのまつことひさになりにけりこむとたのめて
としのへぬれば　（定　四七八）

(16)時雨のみふるの神杉ふりぬれどいかにせむとか色のつれなき　（貞　五五八）

しぐれのみふるの神すぎふりぬれどいかにせよとかい
ろのつれなき　（定　三八六）

(17)山とほみ雲ゐに雁の越えていなば我のみひとりねにやなかなむ　（貞　六〇四）

山とをみくもゐにかりのこえていなばわれのみひとり
ねにやなきなむ　（定　六三〇）

(18)み熊野の椰の葉しだり雪降ば神のかけたる四手にぞ有らし　（貞　六三七）

みくまのゝなぎのはしだりふるゆきは神のかけたるし
でにぞあるらし　（定　三二三）

(19)玉くしげ箱根の海はけゝれあれやふた山にかけて何かたゆたふ　（貞　六九七）

たまくしげはこねのみうみけゝれあれやふたくにかけ
てなかにたゆたふ　（定六三八）

(20)いにしへを忍ぶとなくに磯の神ふりにし里に我は来にけり　（貞　七〇三）

いにしへをしのぶとなしにいその神ふりにしさとにわれはきにけり　（定　五九三）

右のうち、(1)(2)(4)(5)(6)(7)(11)(12)(13)(14)(15)(16)(17)(18)(19)の歌は、一首の歌意の上から定家本の方が妥当であると考えられるものである。ただ、(1)の第三句は、定家本の「はぐくもる」の方が、語句そのものとして穏当であり、(6)の第五句は、和歌の常識として定家本の「またぬ日ぞなき」が適切とされるもの。なおそのうちで解釈上の問題のほかに、(13)の第四句「あはれとぞ思」(19)の第二句「箱根のみうみ」は、声調の上でもあながち実朝的な措辞として考えなくとも、定家本の方をとるのが適当であろう。

(3)(8)(9)(10)(20)は、一応語法の点からのみ定家本をよしとするものではあるが、それは当然一首全体の解釈にも関ること勿論のことである。

これに対して、同じ条件での貞享本をよしとするものは、一〇例前後であり、定家本をよしとするものの数のほぼ六分の一にすぎないのである。

(21)誰にかもむかしをとはむ故郷の軒端の梅は春をこそ知れ　（貞　三）

たれにかもむかしもとはむふるさとののきばのむめは春をこそしれ　（定　三〇）

(22)山ざくらあだに散にし花の枝にゆふべの雨の露ぞ残れる　（貞　八六）

やまざくらあだにちりにし花のえにゆふべのあめのつゆのゝこれる　（定　八一）

(23)おのづからあはれとも見よ春ふかみ散残る岸の山吹の花　（貞　一三三）

をのづからあはれとも見よはるふかみちりゐるきしのやまぶきのはな　（定　一〇三）

(24)野辺みれば露霜寒みきりぐすす夜の衣のうすくやあるらむ　（貞　二五六）

のべ見れべつゆじもさむききりぐすすよるのころものうすくやあるらん　（定　二五七）

(25)秋田もる庵に片しく我袖に消あへぬ露のいくよおきけむ　（貞　二六一）

秋たもるいほにかたしくわがそでにきえあへぬつゆのいくへをきけむ　（定　二三〇）

(26)秋たけて夜ふかき月の影見ればあれたる宿に衣うつなり　（貞　二六七）

あきたけてよふかき月のかげ見ればあれたるやどにこ

ろもうつなる　（定　二四五）

(27)⑨夕月夜満つ潮あひの潟をなみ波にしをれて鳴く千鳥かな　（貞　三五三）

ゆふづくよみつしほあひのかたをなみなみだしほれてなくちどりかな　（定　二九五）

種々の場合の例を掲げたのであるが、語法によるものは、(22)(26)の例のみであり、(23)(24)(25)(27)等は、川田氏によれば定家本の誤写とされるものである。しかしながらこれを端的に誤写とまで判断できるかどうか問題があると考えられるので、ひとまず貞享本をよしとする部類に収めることとした。(22)(26)以外は、一首の解釈の上から貞享本をよしとするものである。

さて数的には、一応前掲のように抽出することはできるが、定家本をよしとするもの、貞享本をよしとするものそれぞれに、概括して何らかの傾向または類似点のようなものは、いまさしあたって考えることはできず、ここまでの操作では、ただ定家本の形を穏当とするものが、その逆の場合よりも無条件に多いというにとどめなければならない。

三

表三項に当るものから抽出する。

(1)⑩春雨の露もまだひず梅が枝にうは毛しをれて鶯ぞ鳴　（貞　一六）

はるさめのつゆもまだひぬむめがえにうはけしほれてうぐひすぞなく　（定　二八）

(2)みよしのの山にこもりし山人や花をばやどの物に見るらむ　（貞　五〇）

みよしのゝやまにこもりし山人や花をばやどのものと見るらん　（定　六〇）

(3)⑪春は来て雪は消にし木のもとに白くも花の散りつもるかな　（貞　八四）

春のきて雪はきえにしこのもとにしろくもはなのちりつもるかな　（定　七九）

(4)⑫萩の花くれ〳〵までもありつるが月出て見るになきがはかなき　（貞　二一〇）

はぎのはなくれ〳〵までもありつるが月いで〻見るになきがはかなさ　（定　一八八）

(5)⑬たまさかに見る物にもが伊勢の海きよきなぎさの秋の夜の月　（貞　二七九）

たまさかに見るものにもがいせのうみのきよきなぎさの秋のよの月　（定　二二三）

(6)[14]烏羽玉のいもが黒髪うちなびき冬ふかき夜に霜ぞおきける　（貞　三三〇）

むばたまのいもがくろかみなびきふゆふかきよにしもぞをきにける　（定　二九九）

(7)ゆふされば浦風寒しあまを舟泊瀬の山に雪ぞふるらし　（貞　三六三）

ゆふされば浦かぜさむしあまを舟とませの山にみゆきふるらし　（定　三二一）

(8)時鳥なくや五月のさ月あめのはれずもの思ふ頃にも有かな　（貞　五三八）

ほとゝぎすなくやさ月のさみだれのはれず物思ころにもあるかな　（定　三九八）

(9)待人はこぬものゆゑに花薄ほに出ねたき恋ひもするかな　（貞　五三四）

まつ人はこぬものゆへに花すゝきほにいでゝねたきこひもするかな　（定　四一六）

(10)[15]塔をくみ堂をつくるも人なげき懺悔にまさる功徳やはある　（貞　六五一）

たうをくみだうをつくるも人のなげき懺悔にまさる功徳やはある　（定　六一六）

(11)[16]玉くしげ箱根の海はけゝれあれやふた山にかけて何かたゆたふ　（貞　六九七）

たまくしげはこねのみうみけゝたあれやふたくにかけてなかにたゆたふ　（定　六三八）

(12)[17]物いはぬ四方の獣すらだにもあはれなるかな親の子を思ふ　（貞　七一八）

ものいはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなやおやのこを思　（定　六〇七）

声調の上での可否は、解釈上の可否よりも一層主観的な印象の要素が入りこむ可能性があり、厳密な意味での客観的な判定は困難ではあるが、比較的判定の容易なものを抽出したつもりである。

(1)は貞享本をとれば二句切となり、定家本では無段落、(4)は貞享本をとれば用言止めとなり、定家本では体言止めとなり、解釈上の問題のある歌ともいうことができるが、意味の上では大きな差異もないので、主として声調の問題としてとりあげたのである。(11)は前章にも掲げ、その四・五句は解釈上に問題がありいまだ決定的な歌意もうち出されていないが、ここでは二句の「海は」と「みうみ」について定家本をとりたい。

(5)(6)(10)(12)は定家本の字余りをとりたいのであるが、(5)は川田民や小島博士も定家本をよしとされており、(6)は鎌田[18]

五郎氏の新見により、本歌の「君待つと庭にし居ればうちなびくわがくろかみにしもぞおきにける」（万葉集三・三〇四）によってもあきらかであり、(10)(12)はそれぞれ川田氏・小島博士等により、定家本の字余りがその声調の鷹揚さということで支持されているようである。ただ、(2)(8)において、定家本支持にその拠が印象的なものだけであることに多少の懸念をもつのであるが、一応これをとりあげることとしたい。

次に、貞享本をよしとするものについて見ると、左の二首をあげることができる。

(13)須磨のあまの袖ふきかへす塩風にうらみてふくる秋の夜の月　（貞　二八一）

すまのあまのそでふきかへす秋風にうらみてふくる秋のよの月　（定　三五）

(14)⑲箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ　（貞　五九三）

はこねぢをわれ越えくればいづのうみやおきのこじまになみのよるみゆ　（定　六二九）

(13)は小島博士も本歌の上から定家本をとられているが、それにしても定家本には三句五句に「秋かぜに」「秋のよの月」と秋が再度詠みこまれていることはどうであろうか。また、(14)は川田氏・小島・高崎両博士等により、貞享本の方が支持されており、斎藤博士はいずれとも言明なく、これはやはり貞享本の支持を有力としなければならない。

四

前述の、定家所伝本または貞享本をそれぞれよしとする類別の仕方に準じて、いずれをよしとも判定するに困難な作品九二首（これも主観の観の相違によって、多少の増減があることは承知しながら）のうちから適宜抽出する。

(1)春は先づ若菜つまむと標めおきし野辺ともに見えず雪の降れれば　（貞　六）

春たゝばわかなつまむとしめをきしのべとも見えずゆきのふれゝば　（定　五）

(2)古寺のくち木の梅も春雨にそぼちて花もほころびにけり　（定　二）

ふるてらのくち木のむめもはるさめにそぼちて花ぞほころびにける　（定　二七）

(3)たづね見るかひはまことに相坂の関路に匂ふ花にぞ有ける　（貞　六五）

たづね見るかひはまことにあふさかの山ぢにゝほふは

なにぞありける　（定　五四五）

(4)風さわぐをちの外山に雲晴て桜にくもる春の夜の月　（貞　九七）

かぜさはぐをちのとやまにそらはれてさくらにくもる春のよの月　（定　五〇）

(5)きかざりき三月の山の郭公春加ゝれる年にはありしかど　（貞　一三）

きかざりきやよひの山のほとゝぎすはるくはゝれるとしはありしかど　（定　一二）

(6)秋ちかくなるしるしにや玉すだれこすのまとほし風の涼しさ　（貞　一七三）

秋ちかくなるしるしにやたまだれのこすのまとをしかぜのすゞしき　（定　一五〇）

(7)古郷のもとあらの小萩いたづらに見る人なしみ咲きか散るらむ　（貞　二〇八）

ふるさとのもとあらのこはぎいたづらに見る人なしみさきかちりなん　（定　一八二）

(8)久かたの空とぶ雁の涙かもおほあらき野の笹の上の露　（貞　二三二）

ひさかたのあまとぶかりのなみだかもおほあらきのゝさゝがうへのつゆ　（定　二三九）

(9)ながめやる心もたへぬ和田の原八重の塩路のあきの夕ぐれ　（貞　二六三）

ながめやる心もたえぬわたのはらやへのしほぢの秋のゆふぐれ　（定　二三三）

(10)さゝ浪やひらの山風さ夜深て月影さびし志賀のからさき　（貞　二八三）

さゝなみやひらのやまかぜさよふけて月かげさむしゝがのからさき　（定　二四三）

(11)流れ行木の葉の淀むえにしあれば暮ての後も秋は久しき　（貞　三三五）

ながれゆくこのはのよどむえにしあればくれてのゝちも秋のひさしき　（定　二六九）

(12)千鳥鳴さほの川原の月きよみ衣手さむし夜や更ぬらむ　（貞　三四一）

ちどりなくさほのかはらの月きよみころもでさむしよやふけにけむ　（定　二九二）

(13)ちぶさ吸ふまだいとけなき緑子のともに泣きぬる年の暮かな　（貞　四〇六）

ちぶさすふまだいとけなきみどりごとともになきぬるとしのくれかな　（定　三四九）

(14)東路やみちのおくなる白川のせきあへぬ袖をもる涙かな

（貞　四七二）

あづまぢのみちのおくなるしらかはのせきあへぬそでをもるなみだかな　（定　四三五）

(15)郭公待夜ながらの五月雨にしげきあやめのねにぞなくなる。　（貞　五三〇）

ほとゝぎすまつよながらのさみだれにしげきあやめのねにぞなきぬる　（定　三九九）

(16)金ほるみちのく山にたつ民の命もしらぬ恋もするかな　（貞　五四二）

こがねほるみちのくやまにたつたみのいのちもしらぬこひもするかも　（定　四八七）

(17)あふ事のなき名をたつの市によるかねて物おもふ我身なりけり　（貞　五四三）

あふことのなきなをたつのいちにうるかねてもの思わが身なりけり　（定　四八八）

(18)旅の空なれぬ埴生の夜のとこわびしきまでに洩る時雨かな　（貞　五八一）

たびのそらなれぬはにふのよるのとにわびしきまでにもるしぐれかな　（定　五二六）

(19)空や海うみや空とも見えわかぬ霞も波もたちみちにつゝ　（貞　五九二）

そらやうみうみやそらともえぞわかぬかすみもなみもたちみちにつゝ　（定　六四〇）

(20)あふひ草かづらにかけて千はやぶる賀茂の祭をねるは誰が子ぞ　（貞　六二七）

あふひぐさかづらにかけてちはやぶるかものまつりをねるやたがこぞ　（定　六五三）

(21)ちゞの春万の秋にながらへて月と花とを君ぞ見るべき　（貞　六七一）

ちゞのはるよろづの秋にながらへて花と月とをきみぞ見るべき　（定　三五二）

(22)とよ国のきくの浜松老いにけり知らずいく世の年か経にけむ　（貞　六九一）

とよくにのきくのそまゝつおいにけりしらずいくよのとしかへにけむ　（定　五〇〇）

(23)世中にかしこきこともわりなきも思ひしとけば夢にぞ有ける　（貞　七一五）

よの中にかしこきこともはかなきも思しとけばゆめにぞありける　（定　六一三）

決定的にいうことは困難であるが、概して一首の解釈上の相違（尤も(6)(7)(9)を除き意味の大きな差異を生ずるものはないが）がありながら、いずれをよしとするとも判じる

根拠の見出しにくい作品として、(3)(4)(6)(9)(10)(13)(17)(18)(22)(23)をあげることができる。その他の一一首をすべて、主として歌調の上での異同としてあげてよいと思われる。

(7)「散るらん」「ちりなん」(12)「更ぬらむ」「ふけにけむ」等は、語法の相違の上から意味の相違も当然考えられるのであるが、一首全体の解釈を大きく左右するものでもなく、むしろ歌調の上での相違の方が、印象的に目立つと思われるので、一応声調の上での部類で考えるものとしたが、そういう作品もなお他に抽出（貞三〇・三三）することができる。

とにかく抽出した二三首のうち、解釈上の語句の相違一〇首、歌調の上での語句の相違一三首の比になるが、これを九二首での比でみると、

A　意味の上からの語句の異同　三六首
B　歌調の上からの語句の異同　五六首

となる。

右のように、定家本と貞享本とでの相違はありながら、解釈の上から、語法の上から、歌調の上からいずれを妥当とも判定しがたい作品については、現時点にあっては結局のところ、解釈または語法の上から定家本をよしとするものが、歌調の上でのそれを数的に大きく上回っているのと逆の集計が出たということが判然としたということである。それが、両本の異同の上での可否を検討する確たる資料とはなり得ない弱さをもつことは否定できない。しかしながら、金槐和歌集の一割以上の九〇首余りの作品に、これだけの語句の不安定性があり、実朝歌風の明確な結論づけにあっては、必ずその総括的な検討を通して、またはそれを何らかの形で結びつけての考察がなされなければならないということは明らかであろう。

また、一・二・三の各章に述べてきた両本の可否についての事項の内容についても、すべての作品が、本章で扱った作品との間に截然たる仕分けをもつとはいいがたく、なお一層の周到な対照がなされるべきである。

五

貞享本の分類（部立）は、巻之上に春部一三二首・夏部四七首・秋部一三二首・冬部九六（うち三六は民部行光の歌）、巻之中に恋部一五六首（うち四四は衣笠内府の歌）巻之下に雑部一五六首（うち六八は素暹法師の歌）、合計七一九首から編成されており、定家本は、春部一一六首、夏部三八首、秋部一二〇首、冬部七八首、賀部一八首、恋部一四一首、旅部二四首、雑部一二八首、合計六六三首から編

成されている。そして、定家本にあっては、貞享本にない賀部・旅部が加えられ、逆に歌数においては五三首少ないのである。そして、定家本にある作品は、すべて貞享本に収められている。そこに当然、定家本の賀部・旅部へは、貞享本の他の部からの移動が見られるのである。逆にいえば、定家本の賀部・旅部からの貞享本の他の部への移動があるということになる。のみならずその上に、所属部の移動が、前述の単純な移動だけではなく、それぞれの部相互間の多少入り乱れた形の移動をみせているのである。次に表示する。

		定家所伝本収載の歌		貞享本収載の歌				
		A 各部の歌数	B 貞享本の他の部にあり、定家本の当部にある歌数（漢字は貞享本の部名）	C 定家本の他の部にあり、貞享本の当部にある歌数（漢字は定家本の部名）	D 貞享本のみにあり定家本のいずれの部にもみえない歌数	E 定家本よりも増加している歌数	F 各部の歌数
1春部	一一六			雑一二	四	一六	一三二
2夏部	三八		雑　一	雑　三	七	九	四七
3秋部	一二〇		冬　一	恋　一（雑一〇）	二	一二	一三二
4冬部	七八			雑　四			
5賀部	一八			雑一八			
6恋部	一四一			恋　一（雑　四）			
7旅部	二四			雑二四（春一二）			
8雑部	一二八			秋一〇（夏　三） 冬一四（恋　二）			
計	六六三			九五			

1春部					
2夏部					
3秋部					
4冬部	秋一（冬一）	五	一七		九五
5賀部	雑一四		（一八減）		
6恋部	雑　二	一八	一四	一五五	
7旅部			（二四減）		
8雑部	夏一（冬　四） 賀一八（恋　四） 旅二四	一七	二七	一五五	
計	九五	五三	五三	七一六	

表のように、その移動歌数は延べ九五首を数え、各部相互の移動のやや複雑なものは、冬部と恋部であり、最も複雑なものは雑部である。そのうち歌数としても最も多いものは、貞享本の雑部以外から定家本の雑部へ（表B8、それと逆に定家本雑部以外から貞享本雑部へ（表C8）の移動である。

その両本間に移動のある作品について、両本のいずれの側からこれを見ても、結果として変りはないので、貞享本

から定家本への移動の側から引例して述べることとする。

貞享本雑部の歌一首が、定家本夏部に、

社頭時鳥　（定　題同じ）

(1)五月雨を幣に手向てみ熊野の山時鳥鳴きとよむなり　（貞六三八　定一四二）

貞享本冬部の歌一首が、定家本秋部に、

水上落葉　（定　題同じ）

(2)流れ行木の葉の淀むえにしあれば暮ての後も秋は久しき　（貞三三五　定二六九）

貞享本雑部の歌四首が、定家本冬部に、

鶴岡別当僧都のもとに雪のふれりしあしたよみてつかはす　（定　題同じ）

(3)鶴岡あふぎて見れば嶺の松こずゑはるかに雪ぞつもれる　（貞六三三　定三三三）

(4)八幡山木だかき松にゐる鶴のはね白たへにみゆきふるらし　（貞六三四　定三三四）

社頭霜　（定　題同じ）

(5)さよ深ていなりの山の杉の葉に白くも霜のおきにけるかな　（貞六三九　定三三〇）

社頭雪　（定　題同じ）

(6)み熊野の椰の葉しだり雪降ば神のかけたる四手にぞ有らし　（貞六三七　定三三三）

貞享本秋部の歌一首が、定家本恋部に、

暮秋歌　（定　こひの心をよめる）

(7)秋ふかみすそ野の真葛かれ〳〵にうらむる風の音のみぞする　（貞三〇七　定四五九）

貞享本冬部の一首が、定家本恋部に、

雪中待人　（定　雪中まつ人といふことを）

(8)けふも又ひとりながめて暮にけりたのめぬ宿の庭の白雪　（貞三八四　定四八九）

貞享本雑部の四首が、定家本恋部に、

遠国へまかれりし人八月ばかりには帰まゐるべきよしを申て九月まで見えざりしかば彼の人のもとにつかはし待し　（定　題同じ）

(9)こむとしもたのめぬうはの空にだに秋風ふけば雁は来にけり　（貞六〇五　定四三五）

(10)今来むとたのめし人は見えなくに秋風寒み雁は来にけり　（貞六〇六　定四三六）

秋のころいひなれたる人のものへまかりしに便につけて文などつかはすとて

(11)うはの空に見し面影を思ひ出て月になれにし秋ぞこひしき　（貞六〇九　定四三三）

(12)名にしおはばその神山のあふひ草かけて昔を思ひいでな
む　（貞六三八　定四九四）

貞享本雑部（六三より六七の間に散在）の一八首が、定家本賀部に、同じく雑部（その冒頭の二二首、三首を隔てて次の二首）の二四首が、定家本旅部に、まとめられて部を編成しているが、その作品の主想において、それぞれの部に収められることが、むしろ穏当であると考えられる。

貞享本各部からの四一首が、定家本雑部に収められていることについては後述する。

両本とも、雑部には四季に収めてもまずまず穏当とみなされる作品が、若干ずつみられるので、右に抽出した中でも、(1)(3)(4)(5)(6)は、両本におけるいずれの所属が妥当であるとも判定することは困難である。例えば比較的雑部において四季の歌の少ない貞享本についても、次のような作品が若干混入している。

あさぼらけ八重のしほぢ霞わたりて空もひとつに見
え侍りしかば　（定　題同じ）

(13)空や海うみや空とも見えわかぬ霞も波もたちみちにつゝ
なみ　（貞六三六　定五四三）

月前千鳥　（定　題同じ）

(15)玉津島和歌の松原夢にだにまだ見ぬ月に千鳥なくなり
（貞六三三　定五六七）

社頭夏月

(16)ながむれば吹風涼し三輪の山杉の木ずゑを出る月かげ
（貞六三四　定なし）

(14)(15)(16)は、雑部のうちでも、詞書や語意からみて神祇歌に属するとみられる作品群の中にありながら、主想そのものからいえば、やはり四季の歌とみてしかるべきかと考えられる。原則的には四季の歌と雑の歌とは区別されるべきではあっても、事実金槐和歌集の両本雑部に若干数配列されている限り、いずれを可とするための手がかりとはなり得ないのである。

(2)の歌は、四季の歌相互間で移動のある唯一の作品であるが、貞享本では別々に「水上落葉」の詞書をもつ歌として別れて配列され、定家本では秋部同題での二首の始めの歌となっている。その次にある歌。

水上落葉

(17)くれて行秋の港にうかぶ木の葉あまの釣する舟かとも見
ゆ　（貞六六　定三七〇）

(14)たちよればころもひすゞしみたらしゃ影みる岸の春の川
（貞六三八　定四九四）

(13)空や海うみや空とも見えわかぬ霞も波もたちみちにつゝ
（貞六三二　定六四〇）

屏風に賀茂へまうでたる所　（定　題同じ）

貞享本でも同一の詞書であり、詠まれている場所も同一ということから、もともと同時に詠まれたものという推測も、無理なくなりたつのであり、その判断を前提とすれば、(2)の歌意、殊に第五句は「暮ての後」の現在を冬とするよりも、今まさに「くれて」いく秋であり、「後」は将来を「秋はひさし」と想う意に解され、秋部に収められるのが穏当とするのである。

(7)は、貞享本では「暮秋歌」四首の第一首、定家本では恋部、詞書「こひのこゝろをよめる」三首の第一首として収められる。その主想のいずれの詞書をとるかによって歌意が違ってくるのであり、歌語そのものからは、いずれを妥当とするかの手がかりを得られないのである。ただ同一詞書における連作的な作品には、その主想や素材となるべきものに共通点が見られるのが普通であるが、「暮秋歌」の四首にあっては、それぞれの主想や素材の共通性が少なく、連作的傾向の薄弱な一連として考えられ、従ってその創作時期を同一にする作品ではないと推測されるのである。

一方定家本では、この歌の次に、

(18)秋の野におく白露の朝な朝なはかなくてのみ消えやかへらむ　（貞四三　定四六〇）

(19)風をまついまはたおなじ宮城野のもとあらの萩の花の上の露　（貞四八九　定四六一）

があり、その三首の間に、詞書のこころを基底にもつ心情の上での共通性が、比較的強くそれぞれの歌を連結しているとみられるのである。それのみが手がかりであるとすれば、この歌は定家本によって恋部にあることがその位置を得たものとしてもよいのである。

(8)は、貞享本の詞書も「雪中待人」、定家本のそれは、「雪中まつ人といふことを」とある独立する一首である。その主想からみても、定家本恋部にあるのは当然のことと認めてよい。

(9)(10)の二首には、両本ともに同じ詞書であり、その中の「彼の人」は、川田氏によれば、「ある人みやこの方へのぼり侍りしにたよりにつけて読てつかはす」の詞書のある恋歌六首（貞享本兄七より六三まで）について、「夫人の連れて来た侍女の一人が上京した時のもの」とあり、「恋歌二首なども、同じ女へのものかも知れない。その女が三条局であったか、駿河局であったか、又は『御台所御方女房』の丹後局であったか否かは、勿論わからない」と推論されている。そしてまた、詞書の口調そのものも唯の縁者知己のこととも受取れない心情がこめられており、作品

からもそういう心情の深さが汲みとれるものである。このような程度では勿論実証的とはいえないのであるが、漫然と雑部に収めるには承服しがたい。情感をうちに静かにしかも深く秘めた佳品であると考えられる。作意的でなしに恋歌として扱うのは独断であろうか。

(11)の歌は、前掲の詞書のある二首のうちの始めの歌であり、次の歌は、定家本にみえない歌である。その代り、定家本にはその次に、

(20)逢ふことを雲井のよそに行く雁の遠ざかればや声もきこえぬ　（貞四一八　定四二四）

の歌があり、その次に(9)(10)の二首がつづくのである。定家本としては、(11)(20)を二首一連としなければならぬ。

「いひなれたる」は、川田氏説の「夫人の連れて来た侍女」ではないであろうが、やはり実朝にとっては、それに類した対象としての女性らしい口吻が詞書からも感じられる。また歌意の上からも、月に人の面影をしのぶのは新古今恋部にも例多く、和歌の常であり、そういう発想をもつことから、当然恋部に収められるべき作品ということができる。

(12)の歌は、貞享本では二首一連として、「同社をよめる」[22]と詞書があり、その第二の歌である。第一の歌は、

(21)あふひ草かづらにかけて千はやぶる賀茂の祭をねるは誰が子ぞ　（貞六二　定六三）

であり、その主想は神祇歌の趣をもつ歌である。(12)の歌の「神山のあふひ」は賀茂社に関連ある語とはいいながら、一首の主想は「あふひ（逢ふ日）草かけて昔を思ひいでなむ」にあり、いずれかといえば恋歌としての歌意に重点がおかれた発想をみることができる。定家本にあっては、恋部の終末に「こひのうた」の詞書をかかげて一括した四九〇より五一一の二二首の恋歌中の第五にあるのが、本来の位置ではなかろうか。

両本の移動にあって、量的に最大のものは、表8Bの貞享本四季の部の三九首、恋部の二首の四一首が、定家本雑部に収められていることである。そして、前述のごとく少数ではあるが、移動のある歌についてみるとき、その収載の所属において、定家本の所属の仕方が、貞享本のそれよりも大体穏当であると思われるものがほとんどである。そのこととは逆に、この四一首の所属にあっては、極く普通に考えて、定家本の雑部にあることが不穏当と考えられる要素が多いのである。すなわち、春部一二首、夏部三首、秋部一〇首、冬部一四首、恋部二首の大部分は、貞享本での所属の仕方が自然な形であるとしなければならない。た

だし、貞享本春部の、

(22)ふか草の谷の鶯春ごとにあはれむかしと音をのみぞ鳴く　（貞一三　定五三九）

(23)草ふかき霞の谷にはぐゝまる鶯のみやむかし恋ふらし　（貞一四　定五四〇）

の二首については、「鶯も昔を恋う」[2]という主想からいって、雑部に収めるのが妥当である。

(24)吾国のやまとしまねの神たちをけふのみそぎに手向つるかな　（貞一七八　定五五三）

(25)あだ人のあだにある身のあだ事をけふ水無月の祓棄てつといふ　（貞一七九　定五五四）

貞享本夏部には二首「六月祓」の詞書があり、定家本でも「祓歌」とあり、内容についても、夏部というよりむしろ神祇歌の主想をもつものということができるのであり、主想が神祇に関係ある内容の歌は、貞享本においても、雑部に相当収められていることから、（ただし、「祓」そのものを直接に主想としたものは見られないが）この二首についても、定家本のごとく雑部に収められているのを穏当とする。

貞享本冬部中の四首のうちにも、詞書「山山に炭やくを見侍りて」、とある一首、

(26)炭をやく人の心もあはれなりさてもこの世を過ぐるならひは　（貞三九九　定五五五）

の歌は、全く述懐歌としての内容であり、雑部にあるべき歌である。また、貞享本冬部に「老人憐歳暮」の詞書をもつ四首、

(27)白髪といひ老いぬるけにや事しあれば年の早くも思ほゆるかな　（貞三九四　定五八一）

(28)老ぬれば年のくれ行たびごとに我身ひとつと思ほゆるかな　（貞三九五　定五八〇）

(29)うちわすれはかなくてのみ過し来ぬ哀と思へ身につもる年　（貞三九六　定五八二）

(30)足引の山よりおくに宿もがな年の来まじき隠家にせむ　（貞三九七　定五八三）

右の歌も季節としては勿論冬の歌というべきであるが、その主想はむしろ歳暮の老人の沁み入るような述懐のこころが歌われているのであり、冬部に入れても不都合ではないが、基本的にみれば、冬部よりも雑部に収める方が穏当であろう。このように、部分的には定家本に従う方が妥当であるとされる作品があるとはいえ、総体的には、貞享本の所属に従うのが穏当であると考えられる。

ただあえていうならば、貞享本四季部恋部の四一首が、

定家本雑部での配列において、八首の他の雑歌を置くだけで、その冒頭五三六から五八四の間に、春・夏・秋・冬の順にまとめて配別されていることである。このことは、その四一首が、定家本においても雑部に配列されながらも、他の雑歌と全く同一視されるということはなく、雑部のうちでの四季的な作品としてまとまりをつけられた形で、一つの区別をつけられていることだけは認めなければならないであろう。

六

金槐和歌集には、同一の詞書をもつ連作とおぼしき作品が数多くみられる。特に、貞享本の作品配列には、たとえそれが実質的な連作でなくとも、同一詞書のもとに多数の作品が配列されている部分が、定家本と比較してより多くの歌数を含めている場合が多いのである。その上、貞享本での同一詞書のもとにある一連の歌が、定家本にあっては、若干に分れてそれぞれの詞書をもつことである。次にそのうちの主たる部分（貞享本における一連一〇首以上の部分）の両本の相互関係を表示する、

	貞享本			定家所仮本		
	詞書	番号（貞享本）	歌数	詞書	番号（定家本）	歌数
夏部	郭公	一四九～一五九	一一（うち定家本に欠くもの一）	(1)ほととぎす (2)五月雨 (3)ほととぎすをよめる	一二五～一二九 一三五～一三八 一四一	五 四 一
秋部	鹿歌に	二三五～二四四	一〇	(1)秋歌 (2)鹿をよめる (3)秋歌	一九二～一九四 二三五～二三九 二五二～二五三	三 五 二
	初冬の歌の中に	三一三～三二二	一〇	(1)冬のうた (2)冬のはじめの歌 (3)冬初によめる	二七八～二八〇 二八一～二八六 五六八（雑）	三 六 一

冬部	雪	三六〇～三七七	一八（うち定家本に欠くもの一）	(1)冬歌 三一七～三一八 二
				(2)雪をよめる 三二〇 一
				(3)冬歌 三二一～三二九 九
				(4)冬歌 三三二～三三四 三
				(5)雪をよめる 三三七 一
				(6)雪 五七八 一
	歳暮	三九七～四〇六	一〇	(1)冬歌 三四三～三四五 三
				(2)歳暮 三四七～三五二 六
				(3)年のはてのうた 五八四（雑） 一
恋部	恋歌の中に	四〇八～四五三	四六（うち定家本に欠くもの八）	(1)恋歌 三七三～三七七 五
				(2)こひの心をよめる 三八四 一
				(3)こひの歌 三八七～三八八 二
				(4)こひのうた 四〇二～四〇四 三
				(5)こひの心をよめる 四〇七～四〇九 三
				(6)秋頃いひなれにし人の物へまかれりしに、便につけてふみなど遣はすとて 四二四 一
				(7)こひのうた 四三一～四三二、四三四、四三七、四四三～四四五 七
				(8)こひ 四四八 一
				(9)こひの心をよめる 四六〇 一
				(10)こひの歌 四八〇～四八一 二
				(11)こひのうた 四八三～四八五 三
				(12)こひのうた 四九一、四九三、四九五、四九七、五〇〇、五〇七～五〇八、五一〇 八

			(13)なでしこ	五五二	一
			(1)海の辺のこひ	三九〇～三九四	五
			(2)こひのうた	四一一	一
			(3)こひのうた	四二八～四三〇、四三三、四三五～四三六、四三八～四四二	一一
			(4)こひ	四四六～四四七	二
			(5)こひの心をよめる	四六一	一
			(6)こひの歌	四七七～四七九	三
			(7)こひの歌	四八六	一
	名所恋の心をよめる	四五四～四九三	四〇（うち定家本に欠くもの三）	(8)こひのうた	四九〇、四九二、四九六、四九八～四九九、五〇一～五〇九、五一六、五一一	一三

これに対して、定家本における同一詞書の連作的配列の形をとっているのは、一〇首以上のもの、恋部に二連をみるだけである。「こひのうた」（四二八～四四五）一八首、「こひのうた」（四九〇～五一一）二二首である。表にはこれを除いたが、六首以上九首までのもの、貞享本では春部一（八首）、冬部一（七首）、恋部一（六首）、雑部四（五首宛）の七連、定家本では、秋部二（七首、九首）、冬部三（九首、八首、六首）の五連を数える。

以上のほか、五首・四首一連のものも掲げればよいが、その程度のものは両本ともに新多くみられるので、それらのものまであげることは、この小論程度の概括的な試論にあっては、かえって比較対照の資料とするには繁雑にすぎるので、右に掲げた程度のものまでにとどめたい。

結論的なものを先にいえば、定家本では同一詞書のもとに一連の歌として配列される作品群が、貞享本のそれよりも多いということ。逆に、一連を形成する歌数において

は、貞享本の方が比較的多いということ。殊に恋部における二つの作品群に、「恋の歌の中に」の詞書をもつもの一連四六首（うち八首、定家本に欠く）、「名所恋の心をよめる」の詞書のもの一連四〇首（うち八首、定家本に欠く）の歌数をみるのである。それを定家本と対照すると、貞享本にあってこれだけの多くの歌数で一連に配列されているものが、定家本においては小刻みに数首毎に乃至はただ一首で詞書をもつ形で配列されている。この二連の中味からいえば、表示のように「恋の歌の中に」の一連が、定家本では一三連、「名所恋の心をよめる」の一連が、定家本では八連に分れて配列されている。

右のような両本相互の作品配列の事情を推測するに、常識的に判断して、多くの歌数の連続した作品群に一つの詞書をもつ形よりも、その同一の作品が一首乃至数首で小きざみに詞書をもつ形の方が、原作品形態に近いものであり、一つの詞書によって大きくまとめられている形態は、むしろ原作品形態に何らかの手が多く加えられた可能性があるとみなければならないのではないか。

歌集形成の過程ということを常識的に想定すれば、大きくまとめられた作品群を、小刻みに詞書をつけ分散配列することの可能性よりも、分散配列された作品を大きくまとめて、そこに作品を総括する、または作品に共通する大まかな詞書を掲げる可能性の方が強いと考えるのが穏当であろう。

しかしながら、このことをもって直ちに、定家本から貞享本への形成ということに結論を運ぶものではない。ただこのような作品配列の相互関係という視点だけから、端的に一応の推定をいそぐとするならば、貞享本よりも定家の方が、何らかの条件で、何らかの過程の上で、原作品形態に比較的近くにあるものとする見方に傾く一つの手がかりを得たものであるとすることができるであろう。

七

定家所伝本と貞享板本との相互間（類従本との対照も、次の段階では是非必要であるが）の対照の結果について、特に語句の異同、分類上の移動、配列の仕方の異同にわたって、極めて表面的なものを荒削りに抽出し、両本のそれぞれの一面の傾向をみてきたのである。そして、それらを統合した蓋然性の上からいうならば、すべてに比較的という但し書きをつけなければならないが、ひとまず次のようにまとめることができる。

1、語句の異同のあるものについては、定家本の方が穏当

と思われるものが多い。

2、しかしながらなお、語句の異同のあるものについては、いずれが妥当であるとも判断することの困難なものも相当数見受けられる。

3、分類項目については、定家本では、貞享本に立てられていない賀部・旅部を設けており、一般的にはその方が整った形式と考えられるが、家集という性格の上からいずれを妥当とすることは決定できない。

4、両本各部類の間に、相互に移動した形になっている作品の所属の仕方については、作品の主想からみて、一部分いずれの所属としても差支えのない作品もあるが、概して定家本の所属を穏当とする。

5、一つの詞書のもとに多数の歌を連続して配列しているのは、判然と貞享本に多くあらわれているが、定家本にあっては、同一の作品が、わずか一部をのぞき、大部分が一首乃至数首ずつそれぞれの詞書をもって配列されている。

定家本の系統とされている類従本との比較対照も、あわせて行わるべきではあるが、まず手はじめとして、異質の伝本たる定家所伝本と貞享板本との小論での条件による対照の範囲では、定家所伝本において穏当な要素を多くみるのである。

なお今後のより綿密周到な検討を期して、大方の御叱正を仰ぎたい。

注

① 「源実朝」川田順。以下の注で上記の所説参照の場合は、「実朝」川田　と略記。

② 「実朝」川田、日本古典文学大系「金槐和歌集」小島吉雄校注、その他に散見。以下の注で小島博士の所説参照の場合は、「大系」小島　と略記。

③ 「大系」小島。「解釈上理がとおる。」

④ 「大系」小島。

⑤ そのうちに川田氏により誤写であると指摘されたもの数例も含まれているが、誤写と判断するのは納得できないので引例とした。

⑥⑦⑧⑨ 「実朝」川田　では誤写とするが、しばらく従うことはできない。

⑩⑪ 「大系」小島。

⑫ 「実朝」川田。

⑬ 「大系」小島。「実朝」川田。

⑭ 「実朝の本歌〈万葉歌〉の出典」鎌田五郎（国語と国文学昭和四十二年九月）

⑮ 「実朝」川田、「金槐集」高崎正秀（日本古典鑑賞講座七）

⑯ 「実朝」川田。意味の上からも定家本をよしとする。「大系」小島はいずれとも見解なし。

⑰ 「大系」小島。
⑱ ⑭と同じ。
⑲ 「実朝」川田、「大系」小島、「金槐集」高崎正秀。
⑳ 「金槐集」高崎正秀。
㉑ 「大系」小島。
㉒ 貞享本のこの歌の一首おいて前に、「屏風に賀茂へまうでたる所」の詞書があり、従って「同社」というのは当然賀茂社であろう。
㉓ 「大系」小島。
㉔ その間に、五四二・五四八・五四九・五六八・五六九・五七一・五七九の八首の雑歌がおかれる。